

## 令和2年度 京都女子中学高等学校 親鸞聖人降誕会



(写真：青蓮院 親鸞童形像)

悪性さらにやめがたし ころは蛇蝎のごとくなり  
修善も雑毒なるゆゑに 虚仮の行とぞなづけたる

(「正像末和讃」『註釈版聖典』六一七頁より)

新型コロナウイルス感染症の拡大で、日本に緊急事態宣言が出されて1ヶ月以上が経ちました。つい最近まで、だれも想像もしていなかった事態が世界を覆い、普段の風景が一変しました。そして今も見えないウイルスに、怯えながら生活する日々です。このような生活がいつまで続くか、誰もはっきりとしたことは分かりません。そんな不安の中で迎える、親鸞聖人の降誕会です。

聖人は、平安時代も終わりに近い承安3年(1173)の春、京都の日野の里で誕生されました。そして、養和元年(1181)9歳の春、出家し比叡山にのぼることになります。聖人が生きられた時代は保元・平治の乱にみられるように、長くつづいていた貴族政治が、新しく台頭してきた武士に取って代わられる時代であり、時代の大き

なうねりの中にありました。そのような激動の社会のなかで、親鸞聖人は、ただひたすらに「生死いづべき道」を求めつづけ、人間について、深く問い続けました。

最初の言葉の現代語訳は、「悪い本性はなかなか変わらないのである。だからたとえどんなよい行いをして、煩惱の毒がまじっている、いつもの行いである。」という意味になるかと思います。聖人は人間の本质は「悪」であると見抜かれていました。

今私たちの置かれている状況を見てみると、なりたくてなったわけではないにもかかわらず、感染したことで、世間からバッシングを受けてしまったり、粹からはみ出した人を貶める行為が頻発しています。そのようなニュースに接したとき、昔聞いた海外のことわざを思い出しました。

「ウェイターはコックを憎む、コックはウェイターを憎む、ウェイターとコックはお客を憎む。」（※聞きかじり

のため、言葉は正確ではないかもしれません。）

この意味は、閉じ込められた空間にいと、どうしても誰かを排除しようとしてしまうことの例えだそうです。みなさんも心当たりがあるかと思います。家族、学校、地域、国、または、こうあるべきという枠、そんな中にいと、どうしても相手に対して許せない気持ちになったりします。そんなとき、親鸞聖人の教えにもあるように、私たちは自己中心の生き方しかできない身であるということ是非思い出してください。そして、私たちが、怒りを覚えたり、誰かを排除しようという思いに囚われたとき、自分は今どのような枠に囚われているのか、そこに目を向けてほしいと思います。

5月21日の降誕会は親鸞聖人がお生まれになられたことをお祝いする日ですが、その教えに耳を傾け、自分自身を見つめなおす機会にしてみてください。

（記 宗教教育センター 湯川 惇）